島田大祭の変容
～コロナ禍の影響を受けて～

冨澤　千鶴
（木場　貴俊ゼミ）

目　次

はじめに
第１章　島田大祭
　第１節　島田大祭の歴史
　第２節　島田市と大井神社
第２章　祭事の調査
　第１節　島田大祭の行事と日程
　第２節　令和４年度における島田大祭の日程
　第３節　令和４年度における島田大祭の行事
第３章　島田大祭の変容
　第１節　過去の大祭との比較
　第２節　大祭参加者へのインタビュー
おわりに

はじめに

新型コロナウイルスの流行によって日常生活の様々が変化した。それは、伝統的に行われている祭りにも大きな影響を及ぼし、祭りが中止や縮小開催されることなどが連日のニュースとなり、様々な変化を見せてきた。

この論文で取り上げる静岡県島田市の島田大祭も、ニュースになった祭りと同様に新型コロナウイルスの影響を受けて、例年通りの祭事ができないのではないかと懸念されたが、開催された。

今回、調査を行った島田大祭は、３年に一度開催される祭りであり、前回の開催は令和元年（2019）で新型コロナウイルスが流行する前であった。そのため、今回調査を行った令和４年に開催された祭りは、新型コロナウイルスの流行後、初めての開催となった。そこで、新型コロナウイルスの流行以前と以後では、祭りにどのような変化が起こっているのかを明らかにすることが本稿の目的である。

島田大祭を調査対象とした理由は、筆者の実家が祭りの参加地域に所属しており、参与観察によって調査を行うことが可能だからである。調査範囲については、祭り全体ではなく、実家が所属する「第三街」を対象とした。筆者も「女子青年」として参加する中で調査を行った。

第１章　島田大祭

第１節　島田大祭の歴史

島田大祭は、３年に一度、静岡県島田市の大井神社が主催となって、10月の連休を利用して行われる、神社の祭神が元の社（御仮屋）へ赴く行事である。

島田大祭の行事は、元禄８年（1695）頃から始まったとされ、旧暦９月13～15日に催された。明治８年（1875）以降は新暦10月13～15日の開催に改められた。今日では、10月15日以前の日曜日もしくは祝日に、最大の行事である「神輿渡御帯祭供奉（お渡り）」が挙行されるように調整されている。この神輿渡御帯祭供奉は、３柱の祭神を、本殿が置かれている大井町からかつて本殿が置かれていた御仮屋町まで渡御するもので、元禄８年に祭式が定まったとされる。江戸時代には、大名行列が先導し、鹿島踊りが神輿渡御に付き従い、寛政８年（1796）には車楽称里（屋台行列）が追加され、この形式が現在にまで継続している［島田市博物館 2007：12］。

島田大祭は、「帯祭」という名前で日本三大奇祭の一つとしても知られている。「島田に嫁にやるには金がかかる」という言葉があり、島田宿に嫁いでくる女性は立派な丸帯を持ってきたという。島田宿に嫁いできた女性は、もともと安産祈願を大井神社にお参りした後、宿場内に帯を披露していたが、見世物のようで不評であったため、大奴が金襴緞子の丸帯を太刀に掛けて練り歩くようになったということが、「帯祭」の由来となって

いる［島田市博物館 2007：12］。

大奴とは、男性が担当する役で、頭は立派な髷が結われ、黒の襦袢、下は褌で大太刀を2本下げ、そこに花嫁たちから預かった丸帯を下げている。とても奇妙な恰好だが、大奴に帯を下げてもらえると安産祈願になると言われており、大奴に自分の帯を下げてもらおうとする人々が続出したという。現在では、丸帯を持って嫁いでくる人はほとんどいないため、祭りの大奴は地元の呉服屋や博物館が保存しているものを使っている［繁原 2011：99］。

また、「長唄祭」とも呼ばれている。これは江戸時代、江戸から長唄芸人を招いて芸を競わせていたことに由来する。現在でも東京から長唄の師匠を招いて、芸を披露してもらっている［島田市博物館 2007：12］。過去には人間国宝の長唄芸人を招いたこともあるという（後述）。

第2節　島田市と大井神社

島田市は、静岡県中部、大井川の両岸に位置する人口約10万人の都市である（島田市公式ホームページ「指定区別人口調」（2024年1月11日閲覧））。古くは、東海道の宿場町として栄え、駿河国と遠江国の境に位置している。

島田市の生活と大きく関係しているのが、大井川である。かつての大井川には、駿府へ西からの敵を攻め込ませないように、橋を架けていなかった。そのため、川を渡るには「川越人足」に担いでもらわなくてはならなかった［島田市博物館 2018］。また、大井川は暴れ川であったため、川留（洪水などで河川の水位が一定限度を越えると川を渡ることを禁止されること）が度々起こって、通行人は足止めを食らい、近隣住民も水害に悩まされていた。そこで、住民たちが、川を鎮めるために篤く信仰したのが、大井神社である。

大井神社は、静岡県島田市大井町に建つ神社である。祭神は、弥都波能売神（水の女神）・波邇夜須毘売神（大地・土の女神）・天照大神（日の女神）の三女神である。かつては、大井川鎮護を、現在は厄除け・厄払いを主なご利益とする。また、女神を祀っていることから、安産祈願など女性関連の御祈祷もよく行われている。

大井神社の歴史は、平安時代にまで遡ることができる。『日本三代実録』には、貞観7年（865）に朝廷から従五位下という位階を賜っている古い社であることがわかる。しかし、大井川流域には「大井神社」と名のある神社が70社以上も存在し、この由緒自体が島田市の大井神社であるかは不明である。古記録や伝承によれば、大井神社は大井川上流の川根本町大沢から大雨によって神様が島田に運ばれて、鎌倉時代以降に島田の下島、現在の御仮屋町（御旅所）に祀られたという。この御仮屋は建治2年（1276）に建立されたともいう。慶長年間（1596～1615）の水害で一度下島を離れたものの、元和年間（1615～1624）に再び下島に遷され、元禄2年（1689）頃に島田宿西側の現在の場所、大井町に落ち着いたとされる［島田市博物館 2007：8］。

先述した大井川の岸に流れ着いたご神体を拾ったのは、杉村家の老女とされる。この杉村家は、現在もあり、子孫たちが経営している漢方薬局の広場には、祭りの際、大名行列と神輿渡御の休憩所となっている［繁原 2011：98～99］。

第2章　祭事の調査

第1節　島田大祭の行事と日程

本章から島田大祭について、具体的に考察していくが、本節では、第105回（2007年）に開催された島田大祭をもとに、祭りの行事と日程を概観することにする。第105回については、島田市博物館の図録に詳しいので、本節ではこの図録を元にして書き進めていく［島田市博物館 2007］。

島田大祭は、神輿の渡御行列につくお供（大名行列・鹿島踊・屋台等）が有名な祭である。お供は、神輿渡御帯祭供奉（お渡り）がある最終日以外は、各自が独立して町内外を巡る。このお供の行列は、古くから島田宿の大井神社の氏子や町内ごとの祭典組織により構成されており、各町内の祭典組織を「街（がい）」という。

大祭の年は、5･6月頃からその年の年番町（現在では年番は本通1丁目から5丁目が順番で行っている。以前は本通6丁目も参加）が各町内へ呼びかけて、準備が始まる。9月に入ると、本格的に協議会が開かれ、神輿の渡御、奉納余興の執行方法など、祭典の具体的な取り決めを定めていく。

年番町は、祭典に関する全ての行事の取り決めや指示、紛争の解決、渉外交渉などを仕切る重要な役割を担っている。

10月に入ると、各町内に大幟（明治時代の書家の筆によるものが多い）が立てられ、〆切り提灯を点す。そして、各町内に町内事務所、青年本部、中老本部等を設置して、大名行列や鹿島踊り・屋台踊り（上踊り）・地踊り等の稽古を一斉に始める。各町内の青年は、応接係、会計係、子供係、屋台係等の役割を与えられ、世話役となって大名行列・鹿島踊り・屋台踊り・地踊り等の日程を定めて、提灯を掲げ隊列を組み、各町内の青年本部へ応接挨拶に廻る。

御仮屋は、旭町の住民が御旅所を建設して、お渡りの準備が調えられていく。

島田では、島田大祭のために隣組が一丸となって「祭講」を組織、各家の収入を勘案して日掛箱を廻して貯金をしていた。そして、この日掛貯蓄を3年間行って、大祭の衣装代などの費用に充てていた。この慣習は、明治から昭和40年代まで盛んに行われ、平成12、3年（2000、2001）まで行っていた町もあったという。

第105回の大祭の日程は、以下の通りである。

10月 初旬　御旅所立て
10月11日　衣装揃え　町内廻り（地踊り・上踊り）、大名行列、鹿島踊り
10月12日　御夕祭　町内廻り（地踊り・上踊り）、大名行列、鹿島踊り
10月13日　御本祭　町内廻り（地踊り・上踊り）、大名行列、鹿島踊り
10月14日　お渡り　お供、大名行列

この中でも、重要な行事について以下説明する。

【衣装揃え（10月11日）】

大祭は、お渡りの3日前の「衣装揃え」から本格的に始まる。これは、祭りの主体となる青年のお祓いである。11日の早朝、各街の青年衆が祭法被に正装して、大井神社拝殿前に集合する。祭りの無事を祈願してお祓いを受ける。その後、各街の女子青年や子供たちがお祓いを受け、祭りの準備がすべて調い、各街でお供は町内披露を行う。

【御夕祭（10月12日）】

大井神社ではいわゆる宵宮祭が行われる。各街のお供はそれぞれ町内外披露を行う。

【御本祭（10月13日）】

中日は「御本祭」といわれ、大井神社では大祭の式が執り行われる。本殿開扉の占式の神事で、祭りが無事行われることを祈る。大奴、大烏毛、鹿島踊りは「お宮めぐり」といって、境内の春日神社前から本殿までを奉納舞をしながら一周する。各街のお供は、前日より町内外での披露が続く。

【お渡り（10月14日）】

最終日、大井神社から御旅所（御仮屋町）までのお渡りの日で、行列は大奴で有名な大名行列を先頭に、神輿渡御行列、鹿島踊り（明治25年までは神輿の前）、屋台と続く。長い行列のため、大井神社を最初の大名行列が出発してから鹿島踊りが出るまで約1時間あまりかかる。屋台は、神社前に待機して行列の最後尾に着く。行列の長さは約1kmにも及び、行列の往復には約10時間かかる。朝に大井神社を出発した行列は、途中、先祖が大井川からご神体を拾ったとされる杉村家で中饌祭を行った後、御旅所へ向かい、祭事の後は大井神社へ戻る。

大名行列は、本通7丁目へ帰って、行列を短縮・再編成して、「本陣入り」が行われる。

第２節　令和４年度における島田大祭の日程

本節と次節では、令和4年度の第110回島田大祭について、筆者が行った調査を基に祭事を詳しく述べていく。調査方法は参与観察で、調査日と調査内容は以下の通りである。

9月 1日　女子青年お囃子・地踊り練習開始
10月 8日　（初日）衣裳揃え、上踊り・地踊り・お囃子披露
10月 9日　（中日）上踊り・地踊り・お囃子披露、位置付け
10月10日　（お渡り）お渡り、本陣入り、上踊り・地踊り・お囃子披露

本節では、日程を具体的に説明する。

【10月8日（土）】

第110回は、コロナ禍の影響もあり、とても変則的な開催であった。本来であれば7日に行われる「衣装揃え」が今回は行われず、各街が時間ごとにお祓いに行くだけに変更となった。また、お祓い自体も本殿まで入らず、本殿前で受けるのみであった。以下、時系列で概要を述べる。

・午前8時30分：全員（23名）集合。ミーティングが行われ、筆者は集合してくる子供たちの世話をすることが最初の仕事になった。
・午前9時30分：大井神社に行き、お祓いを受ける。お祓いを受けた後、木の札をもらい受ける。これは、祭りの参加証のようなものである。
・午後12時：屋台が快林寺の駐車場（屋台置き場）から通りへ出る。通りへ出た後、屋台へのお祓いを受ける。そこから祭りの本会場である、本通りへ向かう。屋台が移動している間、延々とお囃子が演奏された。
・午後12時40分：上踊りの子供の手伝いへ向かう。この間に、屋台は本通りへ移動する。移動の間、屋台の前では、地踊りが行われた。狭い路地での披露であったため、距離が取れなかったと観客から聞いた。
・午後2時30分：屋台が予定位置に到着。ここで子供たちのお囃子が行われた。女子青年も参加した。
・午後3時20分：歩歩路（島田市地域交流センター）前にて屋台踊りが開演。上踊り係がここで離脱するが、花道を作るために、屋台の近くで待機していた。
・午後4時30分：屋台の移動を開始した。移動の際、終始お囃子を演奏した。
・午後5時：予定位置到着。再び子供たちのお囃子。
・午後5時30分：こまつ（料亭）前にて屋台踊りが開演。
・午後6時30分：移動開始。屋台上でのお囃子を再び演奏した。
・午後7時：予定位置到着。ここでは屋台踊りの開演準備のみ。
・午後7時15分：本日最後の屋台踊り開演。
・午後8時25分：屋台が夜間の停車位置へ移動開始。再び屋台上でのお囃子。この時、筆者も屋台上で演奏として参加した。
・午後9時40分：駐車完了後、解散。

この日は、女子青年が休憩なしで参加していたため、その様子を見ていた保護者たちから、休憩なしは問題があるというクレームが入った。

【10月9日（日）】

前日の反省点を踏まえ、適度な休憩を入れ、無理をしないことを念頭に置くことがミーティングで話され、中日が始まった。この日は、大祭3日間の中で最もスケジュールが詰まっているため、自分たちで率先して考えて動くことが求められた。

・午前8時30分：集合。各自で適度に休憩を取る事が求められた。
・午前9時：屋台の移動を開始。この際、子供たちが屋台の綱を引いた。引く際は、お囃子が終始演奏された。
・午前10時：他の街の屋台の移動が遅れたため、待機。
・午前11時30分：移動再開。終始お囃子を演奏していた。
・午後12時：お祭広場に到着。屋台の方向転換が終わり次第、子供の地踊り・お囃子。
・午後12時40分：屋台踊り開演。
・午後1時50分：屋台移動開始。終始お囃子の演奏。
・午後2時40分：子供が綱を引くことができる場所に到着。子供の綱引きで進行し、屋台踊りの位置へ移動した。
・午後2時50分：子供のお囃子、その後屋台踊りを開演した。途中雨が降ってきたが、決行した。
・午後4時：屋台の移動を開始。本通りには停車させず、脇道にてブルーシートを被せた。その後、一時解散。
・午後7時30分：雨脚が強くなってきたため、屋台上ではなく、歩歩路のステージで屋台踊りとお囃子を披露した。
・午後7時30分：翌日のお渡りのために屋台の位置付けをするために移動を開始。終始お囃子付きであった。
・午後8時：喧噪な練（練り歩き）を行いながら、ゆっくり移動した。神社と街の境界線ギリギリまでお囃子は続いた。

・午後9時30分：神社の方に境界を越える。ここから先は男性しか入ることができないため、女子青年は楽器を持ち、本部へ帰還し、その後解散した。

中日の夜には、翌日のお渡りの準備が重なるため、従来から他の日より忙しくなる場合がほとんどである。

また、今回も以前と変わらず（筆者は前々回参加）、神社の境界内に女性はあまり立ち入ることを快く思われていないようであった。

【10月10日（月）】

午前中は雨天のため、全ての予定がキャンセルになった。晴れていた場合の予定は後述する。この日は、大祭のメインであるお渡りが行われるため、屋台街はほとんど待機していた。

・午後12時30分：集合。昨夜屋台を位置付けした場所へ移動。
・午後1時：屋台の場所へ着くが、先頭の大名行列がなかなか進まないため、待機。
・午後2時30分：ようやく順番が来たので開始。地踊りで進みながら、第三街の地区まで移動。
・午後4時：子供たちを解散させて、青年も一時解散した。
・午後6時：お渡りが帰って来るため、整列して待機した。
・午後7時：最後の屋台踊りを開演。その後、祭典委員長の挨拶があり、演目は終了した。
・午後8時15分：屋台を快林寺の駐車場まで移動した。お囃子は21時まで演奏可能なので、それまで終始演奏した。
・午後11時：駐車場内に屋台を入れ、最後に、青年長の挨拶今回の祭は締めくくられた。

午前中が中止にならなければ、次のような予定であった。

・午前8時30分：集合。昨日、屋台を位置付けした場所へ移動。
・午前9時：大名行列が開始。順番が来るまで屋台は待機。その間に屋台の回転が行われる。
・午前11時：第三街、地踊りスタート。本通三丁目まで踊りながら進む。
・午後12時30分：午後の練が始まるまで一時解散。屋台は練のため、本通6丁目まで進み、待機となる（以下、12：00以降の行動と同じ）。

今回は、雨天の影響で当初予定していた位置まで屋台を移動することができなかったため、祭最大の見せ場である､練を行うことができなかった。そのため、練の代わりに第三街内では、予定に無かったお囃子が行われることになった。

第３節　令和４年度における島田大祭の行事

本節では、各日程で行われた行事について、補説を行う。

【練習（9月1日開始）】

午後7時、例年通りであれば8月より開始される予定の女子青年のお囃子、地踊りの練習が、ひと月遅れで開始された。この時に初めて、女子青年の最終的な参加人数の確認と顔合わせが行われた。今回の女子青年の参加人数は23名となった。その他に、お囃子の指導をする中老3名とサポート役の女子中老3名とも顔合わせが行われた。

また、今回の祭りでは、女子青年が屋台の舞台に上がり、お囃子を演奏することが通達された。そのため、例年より練習期間は、短い割に全員が人前に出せるようなレベルにまで上達することを要求され、また担当楽器を早急に決めなければならなくなった。

それに加えて、9月半ばには子供たちの練習が始まるため、それまで教えられる程度には演奏できるように練習しなくてはならないという問題も発生した。

練習するお囃子は、『三街』『道中』『神田』の3曲で、地踊りは『すみよし』1曲のみである。地踊りは、参加者の多くが子供の頃からの経験者だったため、日本舞踊の先生が教えに来る日までに各自確認しておくこととなった。

お囃子は、この日から打ち方を教わることとなった。基本的な楽器編成は、鉦1名、笛1名、小太鼓5名、大太鼓1名である（小太鼓の人数は変動することがある）。まずは全員小太鼓の打ち方を教わり、適性や各自の希望を考慮しながら大太鼓や笛、鉦の担当を決めると中老にいわれた。そのため、全員が小太鼓の打ち方は知っていなければならないことになった。

先述したように、今回の参加者は経験者がほと

んどであったため、比較的複雑ではない『三街』と『道中』については、この日の内に少々の修正とコツの伝授で終了した。しかし、『神田』は拍子が途中で変化するため、後日の課題となった（図1・2）。

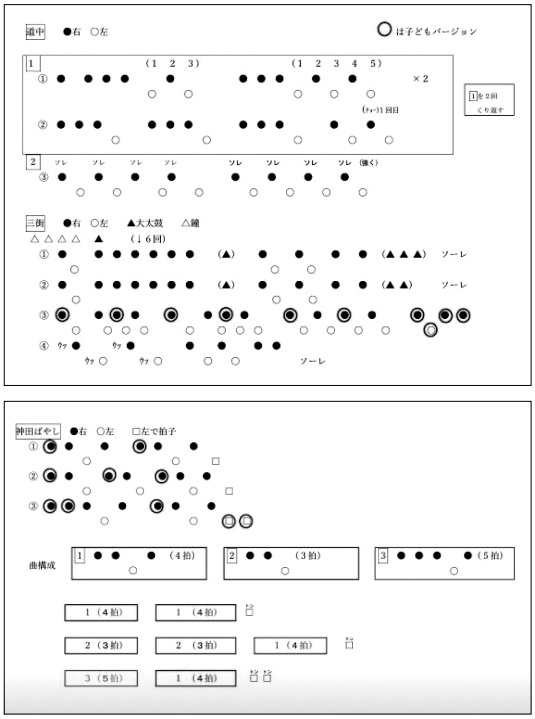

図1・2　お囃子3曲の楽譜（撮影　冨澤）

【衣装揃え（10月8日）】

例年通りであれば前日の10月7日に行われるが、今回より御夕祭が行われる10月8日に集約された。そのため、午前中に衣装揃え、午後から御夕祭が行われるといった形式に変更された。

午前8時30分、「女子青年」という高校生から30歳未満の女性の参加者が指定の場所に集まり、当日の動きを確認した。筆者も女子青年として参加した。この日は祭り初日ということもあり、何が起こるかわからないので臨機応変に対応することが求められた。

女子青年は、祭りに参加する子供たちが集まって来るため、その対応に追われた。子供たちの年齢は、一人歩きができれば参加可能で、1歳から15歳と幅が広い。小学校高学年から中学生は、筆者たちの指示をよく聞いて行動してくれたが、高学年未満の子供たちは指示通りに動いてくれない場合が多々あった。もちろん子供たちには保護者が付き添ってくれているが、その保護者も自分の子供の面倒を見ることに精一杯だったため、全体の状況を把握できていないことが多かった。そのため、女子青年が直接子供に指示を出す係と保護者に伝達する係に分かれることとなった。

筆者は、保護者への伝達することが主な担当になった。保護者は筆者より年上、且つ以前は女子青年として参加していた方がほとんどで、筆者たちの振る舞いも常に注視されていた。これが今回の調査で、一番の壁であったと感じ、他の女子青年も同様に感じたと話していた。

午前9時15分頃に集合場所からおよそ600 mの距離にある大井神社にまで移動を開始した。神社に行くまでに他の街のエリアを通る際、法被を脱がなくてはならないというルールが存在する。このルールは、一つの街に一つの屋台という島田大祭の原則に則り、暗黙の了解として行われているものである。お渡りの日は例外とされるが、その他の日は他街に行く際、必ずその街の応接係（後述）に挨拶に行かなければならない。しかし、個人的な用事などで行く場合は、一通行人である意思表示として法被を裏返しにして着用する（図3）。

図3　法被を脱いで移動する様子（撮影　冨澤）

午前9時30分頃、大井神社にてお祓いを受けた。このお祓いは、祭の無事の開催と期間中の安全を祈って行われた。今回のお祓いは、本殿には入らず、本殿前に整列して受ける形となった。お祓いの後、お祓いを受けた証として木札を受け取る。

その後、午後からの御夕祭まで一時解散となった。

【御夕祭（10月8日）】

この日は、午後からということもあり、町内のみでお囃子・地踊り・上踊りが披露された。土曜日であったため、参加者の集まりが悪く、人手不足などの問題が発生した（図4）。

図4
人手不足で屋台を動かすのに苦労する様子（撮影 冨澤）

【御本祭（10月9日）】

御本祭（中日）では町内だけでなく、他の町内にて演目（地踊りと上踊り）を披露した。先述したように、注意しなくてはならないのは、一つの町内に一つの屋台（街）のみで、複数の屋台があってはならないという暗黙の了解である。

この決まりのため、町の境界線において屋台のすれ違い（喧嘩のようなもの）が従来発生する。しかし、今回の祭りでは、人の密集を避けるため、それぞれ違う境界線から移動するようにタイムテーブルが組まれている。

また、夕方になると雨が降り出したため、急遽屋内ホールでの演目開演が決まり、ホール班と屋台班に分かれた。そのため、ホールへの誘導係がいなくなってしまい、集客ができなかった。これは、反省点として終了後のミーティングで挙がった。

なお、屋台班は疲労で一人倒れてしまったが、その他は問題なくその日を終えた。

【お渡り（10月10日）】

雨のため、午前中の予定は全てキャンセルとなってしまった。この日は全ての街が一斉に動く日のため、勝手に屋台を出したりすることはできない。

午後からお渡りを開始した。屋台は、例年の半分の距離までしか進むことができなかった。そのため、祭りの期間中で一番盛り上がる練を行うことができなかった。

この日は、上踊りの最後の開演が全て町内の本通りにおいて行うことが決まっていたため、各街の音が混じりやすい。そのため、長唄の音がかき消されないように、全ての街の上踊りが終了するまで、屋台の移動はできなかった。全ての街の舞台演目が終了後、屋台は各街の保管場所まで移動して、祭りは終了した。

第３章　島田大祭の変容

第１節　過去の大祭との比較

本章では、従来（主に第105回）と今回（第110回）の島田大祭の行事と組織体制の比較を行う。

比較する内容は、祭り全体の変更点として①「衣装揃え」が一日かけて行われなくなった点、第三街だけの変更点として、②女子中老が新設された点、③女性が屋台の舞台に上がることが可能になった点、④上踊りの人数が減り長唄芸人だけの演目が作られた点の４点である。

①「衣装揃え」が一日かけて行われなくなった点

島田大祭では、観光向けポスターや公式ホームページには記載されていないが、「衣装揃え」という催しが第109回までは行われていた。「衣装揃え」は、祭りの無事の開催を願って、大井神社にて祭りの正装をしてお祓いを受ける行事である。

これは、正式な祭りの開始日である御夕祭の前日に行われる。午前中に祭りの主な運営参加者である、各街の青年が大井神社の本殿前にほぼ全員集合する。そして、お祓いを受けた後、木札を受け取り、午後からの町内披露の準備を行う。

午後には、各街の女子青年と子供たちのお祓いが街ごとに行われる。その後、それぞれの町内に戻って地踊りやお囃子、上踊りを披露する。

この日は、町外に出て演目を披露することはなく、各町内のみで演目を披露し、町内の人々に今回の演目の仕上がり具合を見てもらうという目的がある。

ここで注目したいのが、「衣装揃え」の開催日についてである。先述したように、「衣装揃え」

は、祭りの正式な開催日の前日に行われる。島田大祭は、本祭である「お渡り」を10月15日以前の日曜日、もしくは祝日に行うように開催日を調整している。

いつこのような調整が行われたかは不明だが、10月15日以前の日曜日か祝日に最大の行事である「お渡り」を行うように調整されているため、「衣装揃え」は平日に行われる。

平日は、仕事や学校などで休みではないことがほとんどである。島田大祭が地域の伝統的な祭りということもあり、公立の小中学校は、祭りに参加する子供で「衣装揃え」の日に参加する場合は公休扱いにするなどの特別措置を取っている。

しかし、青年として扱われる年齢層は、ほとんどが学生ではなく社会人であるため、仕事を休むことが難しく、「衣装揃え」に参加できない人々が年々増えている。

かつては、農家や島田市内にある企業に勤めている者がほとんどであったため、企業側も祭りに対しての理解があり、資金援助や参加者である社員への配慮を行っていた。

しかし、近年は市外へ働きに出る者がほとんどで企業も地域と密着しているわけではないので、祭りを理由に4日間の連休を取りにくいと、当事者の男性たちが話していた。

第109回までは、参加できる者が代表して参加し、参加できなかった者の木札も受け取って後から配るという形で、「衣装揃え」を開催日の前日に行っていた。しかし、午後に行う町内披露での人手が足りないという問題が年々大きくなってきている。中老などといった、年配者が手伝ってはくれるが、それにも限界が来ている点がどの街でも問題になっていた。

そこで、今回の島田大祭では、「衣装揃え」を前日に行うのではなく、「御夕祭」と同日に行うことが連合会において決定された。決定の理由は、コロナ禍において、祭り自体は行うが、各街が参加するかどうかは各街の決定に委ねられたことによる。しかも、各街がどのような決定を下すかわからずとも、例年よりも参加者は少なくなるだろうと予想されていた。

また、参加者のほとんどが企業に勤めており、企業から祭りという密集を避けられない行事に参加しないように注意された者もいたため、各街の参加規模の予想が難しかった点も同日開催に踏み切った理由だと考えられる。

同日開催にしたことにより、全ての街のお祓いが半日で終えることができるのかということが懸念されたが、その心配はなく、女子青年と子供たちのお祓いを本殿内で行うのではなく、本殿前とすることですぐに移動ができるようにした。それによりタイムロスが無くなり、効率良く短時間で終わらせることに成功した。

また、今回の同日開催が問題なく行えたことにより、次回からも「衣装揃え」は「御夕祭」と同日に開催することがほぼ決定しているということである。

②第三街において女子中老という枠組みが新たに作られた点

「女子中老」は、かつて女子青年を経験したことのある40歳以上の女性の参加者のことを指す(図5)。

図5　女子中老（前列3名　撮影冨澤）

彼女たちの仕事は、準備期間中は女子青年の指導や練習場所の確保、保護者への連絡係などの雑用である。大祭期間中は、主に芸人係として、長唄芸人たちの付き人をすることや女子青年のフォローにまわる。

前回までは、このような雑用や芸人係も、青年や中老で賄うことができていた。しかし、今回は祭りの中でも重要な役職まで人員が足りないという事態に陥ってしまったため、女子中老が設けられた。

何故このような事態に陥ってしまったのか。そ

れについては、二つの理由が挙げられる。一つは、第三街を構成する三つの町の内、最大人員で第三街の運営主体を担っていた幸町が、今回町としての参加を取りやめたという点である。もう一つは、他二つの町（栄町・本通り三町目）の参加人数が元々少なかったという点である。

幸町は、町としての参加を取りやめたが、個人での参加は禁止しなかったため、個人的に祭りに参加することはできた。しかし、それでも男性の人数は足りなかったため、女性で不足分を補うことになった。そこで、女子中老という枠が新たに設けられた。

また、これまで主な決定権を持っていた幸町が参加を取りやめたことによって、女性参加による男性の不足問題の改善が進んだと考えられる。一方で、幸町には従来の慣習を続けたいと考えている祭典委員も多いという意見（後述）があった。これまで主体として関わってこなかった三丁目と栄町は、男性不足の解消として女性を参加させることについては寛容であったと考えられる。

③女性が屋台の舞台に上がることが可能になった点

前回の大祭までは、女性と子供は屋台の舞台に上がることはおろか屋台に触れることすら許されていなかった。これには二つの理由が存在する。一つは安全上の理由、もう一つは慣習的な理由である。

安全上の理由とは、屋台の構造の問題からくるものである。屋台の舞台は地面から約150cmの高さに作られる。あまり高くはないが、舞台を飾る布幕の裏には直径約120cmの車輪が隠されている。そのため、子供が好奇心で上ったり、隙間に入ったりして怪我を負う可能性がある。

また、屋台は全て木で作られており、塗装はされているが古い木材を繰り返し使っているため、ささくれも散見される。そのため、触れる時は気を付けなければならない。

そのため、女子青年は役割として、子供たちの行動に逐一注意を払わねばならず、子供たちへの手本として触らないようにしている。

次に慣習的な理由である。それは、島田大祭がもともと男性の祭りだからである。島田大祭の主な運営は「青年」と呼ばれる16歳から39歳までの若い男衆が行っている。そして、彼らのサポートをしているのが、40歳以上の男性で構成されている「中老」と呼ばれる男衆である。

この二つの男性の集団によって祭りは運営され、女性は裏方での作業をほとんど行ってきた。現在では、女子青年も街の演目に花を添える役割として当たり前のように存在しているが、これは平成時代に入ってから作られたものだ。

そのため、祭りに参加する男性は、屋台に触れることができる点に特別な優越感を抱いていると考えられる。また、青年と呼ばれる年齢になるまで屋台に触れることもできない。これも、屋台に触れること自体が、男として一人前になった証と見なされているように思われる。

以上の理由により、前回の大祭までは女性や子供が屋台に近づくことは許されていなかった。しかし、今回の大祭では、屋台の移動の際に演奏するお囃子を女子青年がメインで担当することになった。そのため、女性が屋台の舞台に上がらなくてはならなくなった。

この対処についての反対意見はなく、すぐに許可が下りたのだという（後述）。すぐに許可が下りた理由として考えられるのは、女子中老の下りでも記述したが、第三街の運営主体が幸町で無くなったからということが大きい。

また、主導権を握っていた幸町の代わりに今回運営の主体となった栄町は、幸町の男性ほど慣習に固執しているわけではなく、新しい取組にも柔軟な姿勢だった。そのため、女性に対する規制についても緩和させる要因となったと考えられる（図6）。

図6　屋台上でお囃子を演奏する女子青年（撮影　冨澤）

④上踊りの人数が減り、
長唄芸人だけの演目が作られた点

もともと上踊りは、青年が担げる小学校六年生までの子供が対象として選ばれる。大祭ごとに各町から一人ずつ選ばれ、3人の子供が2曲ずつ演目を披露することが例年の慣習であった。

しかし、今回の大祭では第三街の運営主体が発足されても、街として参加するかどうかを決めるまでに時間がかかってしまい、上踊りの子供の選出に時間が取れなかったと聞く。

そこで運営は、今回の大祭では上踊りを演目としては中止し、長唄芸人だけの演目を舞台上で披露してもらうということが最初の会議で決まった。

しかし、三丁目のとある一家の子供がどうしても上踊りを舞ってみたいという本人たっての希望があったため、急遽一人だけ上踊りの子供として選出された（図7・8）。

このように上踊りの人数の変化は、運営の決議に時間がかかってしまったことによるものが大きく、この変化は今回の大祭のみの変化であろうと考えられる。

図7　長唄芸人の演目の様子（撮影　冨澤）

図8　上踊りに志願した子供（撮影　冨澤）

以上、4つの変更について見てきたが、②～④の最大の要因は、連合会が祭りへの参加を各街に決定を委ねたことによる。連合会はコロナ対策として三密を避ける程度の対策しかとらなかった。そのため、どこまで例年通りにやればよいのかを各街が決めなくてはならず、全体像が不透明だった。

そこで第三街ではどこまでやるのかという決議に時間がかかってしまい、参加者集めなどに時間を割くことが難しくなり、さまざまな変更を余儀なくされた。それが却って、従来の問題を改善することにつながったのである。

第2節　大祭参加者へのインタビュー

本節では、今回の調査で聞き取りを行った3名のインタビューを記述していく。特に、女子青年の活動が今回の祭りには大きく関係していたので、二人の女性に聞き取りをした。

インタビューした項目は、①島田大祭について、②今回の大祭の変化について、③大祭を続けたいかの3点である。

【一人目：中老（男性）】

彼は、かつて青年の時代に屋台の屋根係として参加をしたことがある。形式として①から③の質問をしたが、80歳を過ぎた方であるため、主に過去の島田大祭について話してくれた。

①については、過去の祭りの様子を語ってくれた。彼の幼少期はとにかく子供が多く、小学校では5クラスで、一クラス50人以上で構成され、一つの机を二人で使っていたほどであった。そのため、祭りに参加するにも人数が多すぎるという理由で制限がかかっていたという。祭りの参加条件は、三町内に住んでいること、小学生であること、そして男子であること（現在ではこの条件は全て撤廃されている）。

そのため、祭りに関わる町内に住んでいる児童は、参加できない児童から羨ましがられたという。彼が小学六年生の時は、幸町だけで20人もおり、それだけで現在の子供の参加数の半分はいたことになる。彼は上踊りの経験はなく、地踊りだけの参加だったという。

上踊りは、主に3歳から小学生くらいまでの児童が行うもので、また、ご祝儀や衣装代などで100

万円以上はかかったこともあり、簡単に志願できるものではない。彼も「孫たちがやれと言われたときも、やだって言った」というほどであった。

また、上踊りには長唄を歌ってくれる芸人方を東京から呼んで行うため、そのための資金も必要であった。以前には人間国宝の方も呼んだこともあるそうで、その時はとても盛り上がったと語った。

彼が幼少の頃は、現在のように３年に一度ではなく、毎年行われていたという。いつから３年に一度の頻度になったのかは彼も覚えておらず、裏付けとして、先行研究で確認したものの、管見の限りそうした事例を見つけることができなかった。この点に関しての真偽は定かではない。

青年期は祭りの花形だと、彼は語った。もともとこの祭りは青年が執り行うため、青年に重要な役割が多く与えられている。その中でも、特に花形なのが「屋根係」である。屋根係とは、屋台の屋根の上に乗り、引き手に指示を出し、祭の期間中屋台の見張り番を行う係のことを指す。彼は、青年期にこの屋根係に抜擢され、屋台の屋根の上で多くの指示を出したという。

祭りには、一つの町に一つの屋台しか入ってはならず、屋台のすれ違いが町の境で必ず起こる。その際、（現在でも激しいが）喧嘩が頻発し、屋根係同士で屋根の上で喧嘩をして、屋根から落ちて救急車を呼ぶ事態にもなったことがあったという（過去には死者が出たこともあるという）。屋台の下でも喧嘩は頻発し、殴る蹴るは当たり前、ひどい時には道具まで出して喧嘩をしていたという。

また屋根係は、屋台を守る役目も負っている。この祭りで使う屋台は、上踊りの舞台にもなっているため、大きな屋台となっている。そのため、いちいち屋台を片付けるわけにはいかず、祭り期間中は屋根係が交代で見張り番を常に行っていた。特に夜は、酔っ払いが多く、屋台にいたずらをされることもあったそうで、見張り番は屋台に泊まり込み、常に目を光らせていた。また、他の街の者が屋台を破壊していくこともあったといい、その時は喧嘩どころの騒ぎではなかったと語っていた。

彼は「応接係」にもなったことがあり、この係の時は屋台係とは違った大変さがあったと語る。祭り期間中に、他の街の屋台が自分たちの町を通る際、事前にその街の伝令役が来て屋台が来ることを知らせることになっている。その伝令役に応対をするのが、応接係である。応接係は、祭り期間前には三町内の長老家や資金を提供してくださった家々に挨拶廻りをしなくてならず、その際はほとんど飲酒を強要されるため、大変だったという。

また、現在の挨拶廻りは、祭りの約一週間前から行われるが、昔はひと月前から行っており、準備期間の長さでも苦労があったと語った。

彼が青年であった頃は、警察もそれほど厳しくなく、交通整理も厳重ではなかったそうで、毎日夜が明けるくらいまで騒いでいたという。しかし、現在では全てがスケジューリングされてしまっており、屋台も夜９時までには所定の位置にまで運んでいなければならず、随分とつまらなくなってしまったと語った。

彼は第三街所属なので、鹿島踊りや大名行列などにはあまり関わらないが、祭りで行われる大名行列には「大鳥毛」というものがあり、その重さが約８貫（約 24kg）もあるが、それを第七街の連中は投げているのだと教えてくれた。大鳥毛は、商店や家に入ると福が舞い込むとされており、行列の通る道すがらある店はよくご祝儀を払って大鳥毛を店内に入れようとする。現在では取り合いになることはないが、昔は取り合いになっていたという。

中老期は、青年期の頃のように祭に参加せず、青年たちを見守る事が役目だと語った。

中老は、祭りの組織としては最高位のもので、長老クラスや総代などもここに属している。そのため、青年たちが何か問題を起こしたり、青年たちが解決できないようなことが起きたりした場合、その責任を負い、問題を解決する役目であるという。

中老には、祭典委員と本部役員も所属しているため、本部設営も青年より早くに行われるが、役員以外は気楽だという。それは、役員以外の中老の仕事は、本部設営と屋台の組み立て、青年への引き渡し、屋台の解体だけだからで、ほとんどの連中が本部に集まって、昼間から酒を飲んでいたそうだ。

彼は、祭典委員になったことがあり、祭典委員はそんなに仕事はなく、せいぜい祭り期間中に青

年連中が問題を起こさないかを見守っている程度であったという。大変なのは、総代などの本部役員で、仕事は多岐に渡る。

彼は、中老全ての仕事を把握しているわけではなかったので、細かくは知ることはできなかったが、大凡の仕事内容を教えてくれた。

総代の仕事の一つは、長唄の芸人と交渉すること、もう一つは、大凡の予算などを立てて、青年にそれで行えるかを考えさせ、最終的な予算を決定することである。特に、予算の組み立ては、慣れない青年たちに無理を承知でやらせるため、言い合いになることも珍しくはなく、毎回胃が痛いと愚痴をいわれたこともあると語った。しかし、自分たちも過去に経験してきた道だと考えると、この言い合いも楽しいものだったともいっていた。

このように中老は、責任を取るために存在し、自分たちが経験してきたことを青年たちに教えていくことが役目であることを自覚していた。

しかし、現在では青年の人数不足が深刻で、中老の中でも若い者が音響係や屋台の見張り番などを担当しており、後継者不足を嘆いていた。

また本部も、以前は青年と中老で分けていたが、現在では管理できる人がいないため、一つの本部にまとまって祭りの開催を準備しているのが現状だという。

②については、祭りが変化していくことは当たり前で「俺たちはもう終わったもので、これからことにあんまり口を出しちゃいかん。これからを決めていくのは若い連中だらい（である）」と語った。

今回の祭りで女性が屋台に上がることや女子中老が新設されたことについても、当たり前の変化であると納得していた。

③については、先述した通り、自分はもう現役ではないのでこれからを継いでいく若い衆が決めていくべきだと語っていたが、個人的には続けても続けなくても良いと考えているとのことだった。「でも、祭が楽しいことに変わりないから、そのことは教えてやりたい」とも語ってくれた。

【二人目：女子中老】

この方は、女子青年としての参加経験もあり、女子中老が新設される前から個人的に祭りの運営を手伝っていた。

今回は、特に女性に関する変化について語ってくれた。

①について、島田大祭は自分にはなくてはならないもので、この祭りがあるから島田に残ったのだと話した。

②については、とても嬉しい変化であると答えてくれた。なぜなら今までの祭りで、女性は30才を過ぎれば裏方に徹することしか許されず、大々的に法被を着ることすらできなかった。それが今回は、法被を着て参加することが許された。それが何よりも嬉しいといっていた。

彼女の所属は、三町内の内の幸町で、今回は参加を取りやめた町である。そのため、今回の祭りにおいて第三街がどのように参加するかはわからなかったそうだ。

しかし、本通り三丁目と栄町のみでは街を運営することができないと祭典委員が結論を出したとき、栄町の祭典委員から女子中老を新設するので参加してくれないかと誘われたのだという。

実は、女子中老を新設するという話が、コロナ禍以前より出ており、今回の祭りの人手不足を契機に実現に至った。

また、彼女自身も女子中老が新設される以前より、さまざまな雑務をこなすことで、女性でも祭り関係で他の作業をこなして働くことができることを周りにアピールしていた。今回それを認めてくれたような気がして、より一層嬉しいのだそうだ。

また、今回の祭りにおいて女性に関することが一気に改善された原因についても語ってくれた。

まず、一つ目の理由として、三町内の内、ほとんどの役職を執り行っていた幸町が参加しなかったことが大きいと語った。

幸町は三町内の中でも一番参加人数が多く、そこに長く住んでいる町民がほとんどなので、昔から祭りに参加している人が多かった。そのため、昔ながらの祭りのかたちにこだわりを持つ人が多いという認識を持っており、その証拠として女性が祭りに表立って関わろうとすることに、あまりいい顔をされていなかったと語った。

二つ目の理由は、幸町の代わりに、今回の祭りで役職を取り持った栄町が柔軟な対応をとったことであった。栄町は、独自に女子中老の役職をコロナ禍以前より作っていたのだという。そのため

今回、栄町が主導権を握ったことによって、このような（彼女にとっては）改善を行うことができたのではないかと語った。

ただし、今回のような改善が次回も継続するかは疑問だという。それは、今回参加しなかった幸町や老人たちにどう思われるかがわからないからだという。噂によると、次回は幸町も参加するので、栄町に渡った主導権を返してほしいという要望がすでに上がっており、次回は女子中老の参加は取りやめになる可能性も十分にあるので少々恐ろしいとのことである。

彼女は、この変化が続いてくれることを願っているので、今回の自分たちの働きを評価してくれると嬉しいと語った。

③については、島田大祭が大好きなので続いては欲しいということであった。しかし、今回の祭りでさまざまなことが大きく変わったように、変えていかなくてはならないことは積極的に変えていくことが大事なのだという。伝統を守ることも祭りの姿を残していく上では大切なことであるが、その伝統を守るためによそ者を嫌い、新しいことを嫌っていては参加者が減っていくだけだと語っていた。

そのために、時代に沿った祭りを考えていかなくてはならないと主張した。

【三人目：女子青年】

この方は、二人目の女子中老の方の娘で、今回の大祭が女子青年として２回目の参加だという。子供の頃から参加しており、子供時代との比較を語ってくれた。

①に対して、祭りは好きでずっと参加していたいと考えるほどだという。しかし、この第三街の風潮については、意見があるという。それは、どのような風潮かというと、経験者ばかりを優遇して、新しく入ってきた人などには冷たく接することだという。それを彼女は何とかしたいのだと話した。

今回の祭りでは、特にその風潮を強く感じたという。それは、女子青年の募集をかける際、LINEを用いたそうだが、LINEを使った募集は前回の祭りの参加者だけにしか知らされていなかった。そのため、今回から女子青年として参加する予定であった人たちには一切連絡が届かず、前回参加者の人が教えてくれなければ参加できなかった可能性がある（筆者もその一人）。

また、女子青年に限ったことではないが、新人や新たに役職に就いた人に対しての研修が疎かになっているということが不満であると語った。今回は、特に子供係となった青年に対する扱いがひどいものであったという。例年であれば、2、3人が子供係となるが、今回は１人だけで、彼自身何をしたらよいのかわかっていないことがよく伝わってきたという。そのため、このような現状を打開しない限りは人がいなくなっていくのは止められないと強く主張した。

②については、とても嬉しい変化であったという。彼女は､お囃子において鉦を担当していたが、かねてより憧れていた鉦の役割を、舞台の上で叩けたことが何よりも嬉しかったのだそうだ。

しかし、この変化は嬉しいものであると同時に経験者と未経験者との格差を余計に開いてしまうのではないかと心配もしていた。その理由は、次回からは女子青年の全員を順番に舞台に上げるのではなく、優秀な者のみを選抜して舞台に上げようとする方針を聞いたからである。そのため、経験者優遇の風潮が助長され、どこかで新たな参加者が途切れてしまうのではないかと心配をしていた。

③について、祭りは続いて欲しいとのことであった。今回の変化を継続したままで、変えていくべきところは変えていき、変わらずに残していくべきところは残していけばいいという｡ただし、経験者の優遇については対応策を考えなければならないが、それが一番難しいだろうと苦笑まじりで語った。それをどのようにすればよいのか考えていくことも、祭りを続けていく上で大切なのだろうともいっていた。

以上、３名の話を聞いた。三者三様の視点からの意見があったが、３名ともに共通していたことは、このままでは祭りを続けていくことは厳しいということだ。

また、３人とも今回の祭りで変わった点は改善だと評価していた。ただし、女性の二人はそれが次回以降も継続するのかは疑問視していた。

おわりに

今回の島田大祭は、新型コロナウイルスの流行後に初めて開催されたものであった。このときは規制が緩和されてきたこともあり、開催中止にはならなかったが、いろいろな制約や変更が余儀なくされた。そのため、以前から問題になっていた事柄が、一気に顕在化してしまい、一つ一つへの対応を迫られたことが、今回の調査でわかった。

その対応の中で一番大きな変化は、従来の男性の人手不足問題に対して、女子中老の新設など女性の活躍の場が広がったという点である。女性の活躍が広がることは、祭りの継続にも大きく関係し、それを望む男性も少なからずいることが調査でわかった。しかし、新規参加の募集方法など、まだ改善すべき問題は山積している。それを今後どうするのかは、男女関係なく対応が求められる。

しかし、筆者は、これまで第三街に関わってきた経験上、全てが改善するには相当長い時間がかかるのであろうと考えている。それは、問題を後回しにする風潮のようなものを街に感じるからだ。

また、今回の変化が受け入れられたことは、伝統を重んじる幸町が参加しなかったことが大きい。次回の大祭では、幸町が参加する可能性が高いので、この変化を継続するかどうかが今後の街の議論で最大の焦点になってくるだろう。

今回は、コロナ禍が功を奏して当事者にとっては良い方向に変わることが多かった。次回以降の大祭は、コロナ禍以前までとはいかないかもしれないが、ある程度の人数や時間をかけることができるようになるだろう。その中で参加する者には、今回の変化を受け入れることのできない者も出てくると考えられる。その折り合いをどのようにしてつけていくのかが、今後の最大の課題なのではないだろうか。

引用および参考文献

島田市博物館　2007『第43回企画展　島田大祭』島田市博物館

繁原幸子 2011「変容する祭―静岡県島田市の帯祭り―」『女性と経験』第36号

島田市博物館　2018「川越制度」島田市博物館公式ホームページ（2024年1月11日閲覧）